

重なり合う「喪」 ——『アブサロム、アブサロム！』におけるクエンティンの語り

遠藤 郁子

はじめに

ウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』は、南部の農場主トマス・サトペン一家の興亡の物語だといえる。作品の前半部分はミシシッピ州ジェファソンを舞台とし、そこではサトペンの親族にあたるローザ・コールドフィールドとクエンティン・コンプソンの父ミスター・コンプソンが、クエンティンにサトペン一家の物語を語る。6章になると舞台はジェファソンからマサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーヴァード大学学寮内へと移る。ここからクエンティンとカナダ人シュリーヴリン・マッキヤノンによる、サトペン物語の再構築が始まり、作品はクライマックスへと向かう。クエンティンはこの共同幻想を通して、サトペン物語のみならず『アブサロム、アブサロム！』において最も重要なポイントである、ヘンリーによるボン殺しの理由に到達し、近親相姦よりも人種混交の方を罪深いとする南部に自らが生きていると実感するのだ。彼らによる物語の再構築は次第に熱を増し、彼らの会話は共同幻想のようなものになっていき、その声の区別も難しくなっていく。

So that now it was not two but four of them riding the two horses through the dark over the frozen December ruts of that Christmas eve: four of them and then just two—Charles-Shreve and Quentin-Henry, the two of them both believing that Henry was thinking *He* (meaning his father) *has destroyed us all*. . . (267)

こうしたクエンティンとシュリーヴの共同幻想によって再構築される物語は、もはやローザやコンプソン氏の語るサトペン物語とは乖離した、ひとつの「フィクション」になっているかのような印象を与えるだろう。だが、クエンティンに南部／自己理解をもたらしこの「フィクション」が、ローザによる1通の手紙なしにはあり得なかったという事実は、やはり忘れてはならないように思われる。

ローザの手紙をきっかけに、クエンティンはサトペン物語を聞かされる羽目になる。たしかに「そもそもクエンティンはヘンリーに会うまで、ヘンリーと妹の関係を除けばサトペン家の物語にさして興味を持っていない」（諏訪部 367）のであり、ローザの話

を聞きながらも彼が「はじめはローザの情熱を理解せず、自分には関係のない過去のために呼び出されたと彼女をうらむ場面が、かれとサトペン物語との異質性を端的なやりかたで表明している」(平石『小説』167)。そうではあるものの、彼にとってローザとサトペン物語が事実上切り離せないものであるならば、シュリーヴとともにサトペン物語を解説していくなかで彼がローザを理解していくのは必然的であるように思われる。つまり、6章から8章におけるサトペン物語の再構築によって、クエンティンが南部と自己を巡る問題を悟るのであれば、そしてその悟りが彼を震撼させるほどのものであるならば、ローザが彼にサトペンの物語を持ち込まなければならなかった意味についても彼はわかっていくはずだ。クエンティンによるサトペン、南部／自己、ローザに対する理解は、同時に起きていると考えられる。そうであるとすれば、一見すると彼とシュリーヴの熱い語りの下に埋もれているようにさえ思われる、クエンティンによるローザへの理解は、どのようなかたちで作品にあらわれるのだろうか。

6章に始まる、クエンティンによるサトペン物語の再解釈が、同時にローザの再解釈になっていると仮定する際に忘れてはいけないのが、この時点でローザはすでに死んでいるという事実だろう。クエンティンを呼び出すローザの手紙で作品の前半部分が始まっているのに対し、ローザの死を知らせるコンプソン氏の手紙で6章は幕を開けるのだ。クエンティンは父親からの手紙を読み終えずにそれを「ランプの下にある開いた教科書の上」(141)に置き、シュリーヴとの対話を始める。7章の初めでも手紙はまだそこに置かれたままであり、紙の折り目が梔子の原理で持ち上がっているせいでクエンティンの座っている位置からは文字を判読できないのだが、それでも「彼はそれをじっと見ているように」シュリーヴには思われる(166-67)。このような描写から、ローザの死、あるいはそれを知らせる父コンプソンからの手紙と、シュリーヴとの対話はクエンティンにとって切り離せないものだと思われるだろう。彼女の死は、彼がサトペン物語を語り直す契機となるのだ。

サトペン物語を語り始める場面においてクエンティンは、シュリーヴがローザを“old dame”、“Aunt Rosa”などと呼ぶ度に“Miss Rosa”と訂正する。“‘Miss Rosa, I tell you.’ ‘All right all right all right.—that this old—this Aunt R—All right all right all right all right all right’” (143-44) という遣り取りからは、クエンティンをからかおうとするシュリーヴのしつこさと同時にクエンティンの強い拘りが窺える。彼女をミス・ローザと呼ぶことにクエンティンが拘泥するのは、“Aunt”が「南部においては年をとった黒人女性によく使われる」(Roberts 28)からであり、彼は典型的な「南部女性」であるローザに対する敬意を示しているといえるだろう。彼女の語りを聞いていた作品前半部分においてではなく、自らサトペン物語を語り直そうとする時になって初めてみせる彼のローザに対する「まともな」敬意は、彼がこのあとサトペンについて考えるなかで自分自身を、そしてローザを理解し直すことを暗示しているようだ。だが、仮にローザが死ぬ前にシュリーヴが彼女を“Aunt Rosa”と呼んでいたら、クエンティンはこれほどまで頑固にそれを修正したのだろうか。彼はローザが死んだから敬意を払うよう

になったとまではいえないにしても、彼の敬意が、彼にサトペン物語を語るローザではなく、死んでしまったローザに対するものであることにはそれなりの意味があるのだろう。すなわち、ローザの呼び名を巡るシュリーヴとクエンティンの一連のやりとりは、ここからクエンティンがアイデンティティの問題に向き合いながらも、死んでしまったローザに向き合う——彼女を弔う——ことを示唆するように思われるのだ。

サトペンについて語り直すなかで、クエンティンは南部と自分自身について学び、同時にいまは亡きローザに向き合っていく。本稿は、ローザの死を知らせる手紙を機に始まったクエンティンによるサトペン物語の再構築が、ちょうど彼女の死を悼む「喪」の儀式のようになっていくと仮定するところから始まる。この仮説を検証するために、本稿では『アブサロム、アブサロム！』後半におけるクエンティンの語りの変化に注目し、その語りの移り変わりが、ローザの人生における「喪」の行為の変遷と並行関係にあると示唆したい。つまり、ローザが自らのアイデンティティ／南部に向き合いながら「喪」の性質を変えていくプロセスと、クエンティンがその語りのなかでアイデンティティ／南部に向き合わされていくプロセスとは類似するものであり、それは自己を理解するなかでローザについて思いを馳せる彼の語りが「喪」としての性質を帯びていくことの証左となると考えたいのだ。

サトペン物語の再構築を始めたクエンティンは、何度も目の前に開かれたローザの死を知らせる手紙に目を遣るのであり、その姿は「(もし何かに話しかけているとすれば) その手紙に」「話しかけているようにみえる」(205)。ここで彼は、コンプソン氏がローザの死を説明してしまうのを忌避し、否定しようとしているようだ。しかし、6・7章で常にクエンティンの語りを誘い出しているように描かれるその手紙は、8章になると彼の目の前から消えたかのようにまったく描写されなくなる。彼の目の前にあるはずのその手紙は、彼とシュリーヴが熱心に推理する、チャールズ・ボンからジュディス・サトペンへの手紙やサトペンからユーレリア・ボンへの手紙に取って代わられるようでさえある。こうした一連の流れを、クエンティンは共同幻想に熱中するあまりローザの存在を忘れたと考えるのはいささか早急だろう。そうではなくて、彼による語りないしローザへの理解の性質が変わっていると考えられないだろうか。最終章である9章の終わり、サトペンの物語を語り終え、彼が“Now he (Quentin) could read it, could finish it” (301) と感じて再び父親からの手紙を読み始めることができるのは、6章から9章にかけての彼の語り／ローザに対する理解の変質によると思われるのだ。

本稿は、クエンティンがサトペン物語を語るときの変化と、ローザによる「喪」の変化の類似性を指摘し、彼がその語りのなかでローザの死を悼んでいる可能性を指摘したい。さらに、こうした物語構造が作品において持つ意味を考察するところまでを本稿の目的とする。

1. 南部共同体への戸惑い

クエンティンによる語りの変質をみる前に、本稿ではまずローザの「喪」の行為について考えたい。すでに中年にあった母親の命と引き換えに生まれたローザは、「母親の死に罪悪感を抱きながら」、つねに何かを「喪失した状態で生まれてきた」(Edenfield 58)。この意味において彼女はつねにすでに何かを哀悼しながら生きる定めにあるといえるだろう。彼女が(自分を生んだ母親を除けば)最初に身近なひとの死を経験したのは、彼女の姉エレン・コールドフィールドのものである。正確に言えば、彼女は姉の死に対してほとんど何も語らないため、それがどのようなものだったのかはクエンティンや読者にはわからないのだが、この「わからなさ」にこそ意味があると思われる。ローザはクエンティンに向かって *"I saw Ellen die with only me, a child"* (12)、*"Ellen had had to live and die a stranger"* (111) と、エレンの死を曖昧に語るか、*"after the two years since Ellen died"* (108) とエレンが死んでから2年後の話をするだけであり、実際に彼女がどう死んだのか、その死に対してローザは何を思い、どう反応したのかはわからない。エレンが「死んだというよりむしろ消えたようにみえる」(Roberts 32) のは、ローザが彼女の死を語らないからだと思われるのだ。これは、ローザが父グッドヒュー・コールドフィールドやチャールズ・ボンの死とそれに対する自身の振る舞いを比較的詳しく語ることを考慮するといささか不思議である。だが、彼女は「彼女が生まれた時にはもうすでに7年間も年長の娘の結婚に対して喪に服している一家」(Edenfield 58) のなかに生まれている。サトペンとの結婚が姉の「死」を意味していたと考えれば(エレンが悲しみの涙に暮れる結婚式の様子は、結婚式というよりむしろ葬式のようにさえある)、ローザにとって問題となるのは、エレンの実際の死ではなく、姉がとうの昔に「死んで」いて、それがコールドフィールド家の破滅をもたらしたという事態なのだろう。つまり、ローザは幼いころからずっと、姉の「死」を悼みながら生きてきたのだ。

ローザが次に経験したのは、彼女の父親コールドフィールド氏の死である。だが父親に対する彼女の「喪」は、エレンの「死」と同様に実際に彼が死んだ時ではなく、それより3年前の彼が幽閉生活に入った時に彼女が選んだ、南軍兵士へ頌歌を詠む行為によるといえるだろう。彼が屋根裏部屋に自らを閉じ込めるために釘を打つ様子は、棺桶に釘を打つ姿を想起させるように、南部のために戦うことを拒絶した南部男性コールドフィールド氏の「死」を意味する。ローザは父親が屋根裏に閉じこもると同時に南部兵士——「死んでしまった」父親がなり損ねたもの——へ捧げる詩を詠み始めるのであり、彼女にとって頌歌を詠むことは、南部人としての父親の「死」に対する「喪」の行為だったと考えられる。3年間の「喪」に服したのちに、父親が食を断ち本当に死んでしまうと、彼女は淡々とそれを受け入れるのだ(66)。こうして父親の強烈な「死」を経験したローザは、その後の人生においても死者を弔い続けることになる。

南北戦争に敗北する以前のローザにとって、「喪」の行為は、その人物の死に対する

嘆きや悲しみからのものではない。そうではなくて、その人物の死が意味する何らかのもの、彼女の理解をはるかに超える何か大きな力に対する戸惑い、狼狽である。ジェファソンの共同体を代表する「正しい」南部人家庭に生まれ、「少なくとも40歳」(46)で彼女を生まなければならなかった母を幼くして亡くし、共同体の英雄的人物と結婚し「南部淑女」のパロディのような愚かな姿を曝す姉を見ながら育ったローザが、自分の孤独や不幸が自分には逆らい難い大きな力によると考えていたとしても不思議はない。エレンや父親に対する「喪」の行為は、自分を不幸にする何か大きな力——旧南部共同体——に対峙したローザの、言語化出来ない恐怖心によるといえるだろう。

ここで、6章初めのクエンティンの語りについて考えてみたい。6章初めで、コンプソン氏によるローザの死を知らせる手紙を読み進める／読み終えることを拒むクエンティンは、父の雄弁な言葉によるローザの死に対する解釈を拒み、自らの言葉で彼女の死を解釈しようとしているように思われる。実際に、クエンティンが読もうとしない父からの手紙の続きには、9章で明らかになるように、何ともコンプソン氏らしい、自分勝手な解釈が綴られているのだ。

Surely it can harm no one to believe that perhaps she has escaped not at all the privilege of being outraged and amazed and of not forgiving but on the contrary has herself gained that place or bourne where the objects of the outrage and of the commiseration also are no longer ghosts but are actual people to be actual recipients of the hatred and the pity. It will do no harm to hope—You see I have written hope, not think. So let it be hope.—that the one cannot escape the censure which no doubt he deserves, that the other no longer lack the commiseration which let us hope (while we are hoping) that they have longed for, if only for the reason that they are about to receive it whether they will or no. (301-02)

コンプソン氏は、ローザの死がこうであると「考える」のでさえなく、「望む」のであり、しかも彼が「望む」とその内容は彼にとっては真実になる。さらに彼は“us”／“we”という単語を用いることでその「望み」(あるいは真実)を息子クエンティンと共有しようとしてさえいるのだ。だが、すでにローザに連れられてヘンリーとの邂逅を果たしてしまったクエンティンが父親の手紙を拒絶する姿は、彼にとって彼女の存在はコンプソン氏にとってのそれとは違うものになっていることを仄めかすように思われる。彼の父親はおそらくローザの死を悼んでさえないのかも知れないが、本稿が仮定するように、クエンティンがこのあとの語りにおいてローザを弔うのはおそらく不可避なのだから。

ローザの死に対する父親の見解を拒みながらも、クエンティン自身はそれに代わる何らかの意見を持っているわけではない。というよりも、そうであるからこそ彼はサトベ

ンの物語を再構築し始めなくてはならないのだ。「人生で100回も会ったことのない」(48) クエンティンに彼女の人生について突然語り始め、彼を連れてサトペン屋敷に行きヘンリーとの再会を果たし、その3ヶ月後に彼を連れるために再び屋敷に赴き、それから数週間後に死んだローザをクエンティンは十分に知り得ていない。それでも、クエンティンは、屋敷に乗り込み果敢にその奥に潜むものの正体を知ろうとするローザの姿を目の当たりにしている。彼がこのときに受けた衝撃は決して父親と共有できる類のものではなく、だからこそ彼はローザの死に対する父親の答えを受け入れるのではなく、彼自身の答えをみつけようとし、父からの手紙を読むのを止めるのだろう。ローザによる「喪」の行為が、エレンや父親に死をもたらしした何らかのもの、または南部社会の「わからなさ」をあらわしたように、6章におけるクエンティンによる語りもまた、ローザというひとりの南部女性（の死）の「わからなさ」から始まっていると思われるのだ。

2. 南部人になる

南北戦争が終わった後にローザが行う「喪」の行為は、戦争前とは性質を変えている。それをいち早く示すのがボンの死だ。南北戦争が勃発した年にコールドフィールド氏が屋根裏部屋に籠もり釘を打ち付けてから4年後の終戦の年、ローザは町の男たちがボンの屍が入った棺に釘を打ち付ける姿を見て、彼の死を知る。しかしながら、ボンの実物どころかその死体さえも見ることはできなかったローザには、その死を実感出来ない——*“I remember how as we carried him down the stairs and out to the waiting wagon I tried to take the full weight of the coffin to prove to myself that he was really in it. And I could not tell. . . . Because I never saw him. You see?”* (122)。彼女はこの直後からサトペン屋敷に移り住み、ジュディスやクライテムネストラ・サトペンと共に生活するようになる。そうする必要性はなかったにもかかわらず(123)、自分がジュディスやクライティとの共同生活を選んだ理由は、彼女たちと「まったく同じように」「そこでサトペンを待っていた」(124) からだとローザはクエンティンに話す。確かにそうなのかも知れないが、彼女がサトペンを待たなくてはならなかった理由は、結局のところ、間接的にではあれ、ボンの死にあると考えられる。というのも、ボンと結婚するジュディスに自分を重ね合わせてウェディングドレスを作っていたローザは、ボンを亡くして寡婦同然となったジュディスにもまた自らを同一化し、何らかの理由があってヘンリーに殺されてしまった彼をクライティとともに悼まなくてはならなかったと思われるからだ。彼女たちがその共同生活の間に「一度たりともチャールズ・ボンについて触れなかった」(127) にも関わらず、というよりも、だからこそいっそう、彼女らの生活はヘンリーが殺してしまったボンに対する「喪」になっているといえるだろう。

ヘンリーによるボン殺しの不可解さ、それがサトペン家にもたらしたように思われる

混乱を解決に導き、もとの叙事詩的世界をつくってくれる英雄としての「父」サトペンの帰りを待ちながら、彼女らは「喪」に服していたものと思われる。この時期を振り返り、ローザはクエンティンに次のように語る。

So we waited for him. We led the busy eventless lives of three nuns in a barren and poverty-stricken convent: the walls we had were safe, impervious enough, even if it did not matter to the walls whether we ate or not. . . . We kept the house, what part of it we lived in, used; we kept the room which Thomas Sutpen would return to. . . . (124-25)

こうした描写はスコットが “For many women life after 1862 was a series of traumas. As they worked to keep plantations, farms, and homes going, the fate of husbands and sons in the army was a constant source of anxiety” (Scott 86) と述べるような、南北戦争期の南部女性たちに共通する生き方を想起させる。だが、ローザ、ジュディス、クライティがこのような生活を送ったのは敗戦後であり、ボンの殺害後である点には注意が必要だろう。すなわち、3人の共同生活はボンに対する「喪」であると同時に、敗北した南部（敗北により葬られた古き良き旧南部）に対するそれになっているのだ。トマス・サトペンという旧南部人の「デザイン」がボンの死を引き起こしていると考えれば、彼女らによるボンを弔う行為は、彼女らがそれを意識していなくとも、同時に旧南部の死をも悼む行為になっているといえるだろう。ジュディスやクライティとともに暮らすことを自ら選んだローザにとって、弔いの行為は、もはや旧南部共同体に対する漠然とした戸惑いではなく、自らを南部女性としてアイデンティファイする振る舞いになっていると思われる。

ローザはのちに、彼女の人生でおそらく最も衝撃的な事件となる、サトペンによる求婚と侮辱を経験する。彼女がサトペンに投げられた侮辱の言葉が、シュリーヴの推測するように、彼らの子どもが「もし男の子だったら結婚しよう」（144）に類するものだったとして、またそうでなくとも、ローザは彼にその台詞をいわせたのは南部のイデオロギーだと感じとったのではないだろうか。なぜなら、荒廃したサトペン屋敷に暮らし、敗戦後のサトペン／南部にじかに接していた彼女は、サトペンが自分に求婚しなければならず、さらに彼女も一度はそれに応じてしまったのは、南北戦争による南部の敗北と関係があると気付いていたはずだからだ。この事件についてクエンティンに語るとき、ローザは “They will have told you how I came back home. Oh yes, I know: ‘Rosie Coldfield, lose him, weep him; caught a man but couldn’t keep him’ —Oh yes, I know (and kind too; they would be kind): Rosa Coldfield, warped bitter orphaned country stick called Rosa Coldfield, safely engaged at last and so Off the town, the country; they will have told you” (136) と話し始める。ここで彼女は、共同体の人びとをあらわす “They” と、彼らがコールドフィールド家の娘として彼女を噂してき

たことを示す自らのフルネームを何度も繰り返す。南北戦争を経験した彼女は、姉エレンのサトペンとの結婚やコールドフィールド氏の幽閉生活に漠然とした恐怖を抱いていた頃とは違って、それらと同様にサトペンによる侮辱もまた、南部の共同体とは切っても切れない関係にあると知っているのだろう。

1909年の時点で “Miss Coldfield in the eternal black which she had worn for forty-three years now, whether for sister, father, or nothusband none knew” (3) と描写されるローザは、サトペンに侮辱された 1866 年から喪服を身につけていることになる。幼いころからサトペンと共同体のせいで不幸を味わい続け、自分はいつか幸せになるというロマンティックな欲望までも打ち砕かれた彼女は、有り得たかもしれない幸せな自分自身の「死」を悼んできたのだろう。彼女は自分を不幸にしてきたサトペンと南部共同体を憎みながら、「喪」に服しているのだ。6 章で父親と訪れたサトペン墓地を回想する場面で、クエンティンは “*Judith Coldfield Sutpen. Daughter of Ellen Coldfield. Born October 3, 1841. Suffered the Indignities and Travails of this World for 42 Years, 4 Months, 9 Days, and went to Rest at Last February 12, 1884. Pause, Mortal; Remember Vanity and Folly and Beware*” と書かれたジュデイスの墓を思い出し、その墓石はローザが注文し、文字を彫らせたのだと確信する (171)。藤平育子は、この碑文に「コールドフィールド」のミドル・ネームが入っている点について、ローザが「サトペンによって滅ぼされたと信じて疑わぬ『コールドフィールド』一族の名前をジュデイスに刻み、ジュデイスのアイデンティティを創作」し、「さらには自分自身の怨念をこめたのである」という。さらに、ジュデイスの墓だけがサトペンやボンらの他の墓石から孤立している点については「彼女がボンと結婚しなかったこと、ゆえに生涯独身だったことを我が身に重ね、ジュデイスの幻想の家族像を破壊したのかも知れない」と続ける (238)。つまり、南北戦争が終わったあとのローザによる「喪」の行為は、それを見たコンプソン氏が “*They lead beautiful lives—women*” (156) などとは決していえないような、南部に対する呪怨に満ちたものなのだ。死者に自らを重ね合わせ、路行く者、南部人たちに「立ち止まりなさい」と忠告するローザにとって、南部とは、彼女の外にある理解出来ないがそれゆえに何か偉大なものではなく、苦渋にみちた自らの人生そのものである。

かくしてジュデイスの墓石にローザが彫った碑文は、ローザによる「喪」の変化を如実に示すと考えられる。だがここでその行動に変化をみせるのはローザだけではでない。まさにこの墓地の風景を再生するクエンティンもまた、ローザの死をきっかけにして始めた彼の語りを変化させているように思われるのだ。彼はここでジュデイスの墓に書かれた碑文がローザによるものだと再認識し、 “*Yes. I didn't need to ask who invented that, put that one up thinking Yes, to too much, too long. I didn't need to listen then but I had to hear it and now I am having to hear it all over again because [Shreve] sounds just like Father: Beautiful lives—women do*” (171) と考える。この時クエンティンは、実際に墓場を見た当時の彼自身はもちろん、「葬式や墓」に「計り

知れない重要性」(156)を見出す存在として女性を一般化し賞賛するコンブソン氏に比べてより正しくローザを理解し始めたといってもよいだろう。

諏訪部浩一は、クエンティンがボンの身元をいつ知ったのかについて、クエンティンは『『真実』の抑圧を望んでいる」ため、6章から8章が「北部での会話以前に[クエンティン]が経た推理過程を大筋において再現する」と論じる(367)。その上でクエンティンの謎解きの手順としては、6章における墓場の回想場面で抱く『『ジム・ボンドとは何者か』という問いが最初のものであった」(368)と指摘する。クエンティンがボンの身元を知り、ヘンリーがボンを殺さなくてはいけなかった本当の理由を理解してしまう時、すなわち、南部人にとっては(クエンティンにとって個人的にかなり切実な問題であるはずの)近親相姦よりも人種混交の方が重大な問題なのだと彼が理解してしまう時、彼は南部人としての自らの宿命を引き受けなくてはならなくなる。このように墓場の回想はクエンティンが「南部人」となるイニシエーションの契機となると考えると、同じくこの回想場面において彼がローザのジュディスに対する弔いを再発見しているのは偶然ではないように思われる。つまり、6章に始まったクエンティンによるサトペン物語の再構築が、サトペンに対する「わからなさ」から彼自身のアイデンティティに関わる問題へと変化すると、彼はローザについて考え、南部女性としての重荷を背負って生きなければならなかった彼女を悼むようになるのだ。南部と自己に対する彼の認識が変わりつつあるから、彼にはジュディスの墓が示すローザの「喪」の行為がみえるのであり、それこそが彼のローザに対する「喪」の行為になっているといえるだろう。

作品の6・7章においてクエンティンはローザの死を知らせる父からの手紙をつねに意識しているが、8章になるとその存在をほとんど忘れたかのようにシュリーヴとの共同幻想に熱中し、この章のクライマックスであると同時に作品全体の最高潮でもある、ヘンリーによるボン殺しの理由が明らかになる場面を迎える。だが、8章においてクエンティンの意識がローザに及んでいないようにみえるのは、彼がローザの存在あるいは彼女の死を軽んじているからだと考えるべきではないだろう。ローザによる「喪」の行為が変化する過程が、クエンティンが死んだローザを理解する過程に呼応すると議論してきた本稿では、8章で彼の語りがローザから離れているようにみえるのも、むしろ彼がローザの死に真摯に向き合おうとする姿勢の帰結として捉えたい。というのも、ローザによる「喪」の第2段階が南北戦争敗戦による彼女の南部女性としての意識の芽生えとその苦悩を示すとするならば、クエンティンが8章でヘンリーに自己を重ね合わせ、南北戦争終了間際のキャロライナに臨場する場面は、南部男性としての自意識の芽生えと苦悩の最たるものといえるからである。ある批評家は、5章におけるローザのモノローグは「後の章におけるクエンティンの語りのスタイルと酷似している」(Dimino 184)とし、それがクエンティンの意識の中にあるものだからだと理由づけるが、本稿では、5章のローザの語りとのクエンティンの語りが似ているとすればそれは、絶望的になりながら南部人としての宿命を悟る(悟りつつある)2人の姿勢に起因すると考

えたい。

3. 「喪」のために死す

『死の床に横たわりて』におけるバンドレン一家の葬送行について、諏訪部は、「すべてを『あるべきところ』に捉えないと気がすまない」バンドレン家のロマンティシズムが「葬送行の過程で明らかになる」と指摘したうえで、「葬式とは、共同体において生者が死者を弔い、内面化し、忘却するための儀式、つまり死者を『あるべきところ』に収めるための儀式」であり、「埋葬が終わるまで、アディは（『家族』をより小さな単位とする）共同体との関係においては『死にかけている（dying）』だけであり、『死んでいる（dead）』わけではないのだ」という（59-60）。諏訪部の論じる葬式の性質は、『アブサロム、アブサロム！』におけるローザによる「喪」の行為について考える際にも有効だろう。すなわち、ボンと結婚するジュディスに自らを重ね合わせたロマンティックなローザは、コールドフィールド家とサトペン家の人びとの死を「あるべきところ」に収め、彼らを「内面化し、忘却」するために、その生涯をかけて「喪」の行為に服してきたと考えられるのだ。しかしながら、彼女が最後まで受け入れ、忘れようとしていない死者、トマス・サトペンがいる。5章におけるモノローグの最後で、ローザはクエンティンに向かってサトペンの死について語る。

I was told, informed of that too, though not by Jones this time but by someone else kind enough to turn aside and tell me he was dead. 'Dead?' I cried. 'Dead? You? You lie; you're not dead; heaven cannot, and hell dare not, have you!' But Quentin was not listening, because there was also something which he too could not pass—that door, the running feet on the stairs beyond it almost a continuation of the faint shot, the two women, the negress and the white girl in her underthings (made of flour sacking when there had been flour, of window curtains when not) pausing, looking at the door, the yellowed creamy mass of old intricate satin and lace spread carefully on the bed and then caught swiftly up by the white girl and held before her as the door crashed in and the brother stood there, hatless, with his shaggy bayonet-trimmed hair, his gaunt worn unshaven face, his patched and faded gray tunic, the pistol still hanging against his flank. . . . (139)

ローザは、サトペンの死を聞かされても、それを信じようとししない。さらに、ここでクエンティンが彼女の話聞いていないため、彼女がその後サトペンの死にどう向き合ってきたかがクエンティンと読者にはよくわからないままに作品が6章へと進んでいく点

は示唆的である。こうした流れは、ローザがまだサトペンの「喪」に服しておらず、それをするにはクエンティンの助けが必要であることを物語るように思われるのだ。それだけでなく、クエンティンが（彼にとって個人的に非常な関心がある）ヘンリー／ジュディス兄妹の光景に心を奪われ、もはやローザの語りを聞けなくなっているという事態は、ローザとクエンティンの双方にとって、サトペン屋敷におけるヘンリーとの邂逅が、それぞれにとってのサトペン物語を完了させるうえで必要不可欠であることを示すのだろう。

ローザによる「喪」の行為は、敗戦前は強大な南部共同体の不可解さを、敗戦後は自分がその共同体の一部だという自覚とそれに対する憎しみをあらわすようになったと考えられる。だが、彼女による弔いの行為は最後にもう一度変化をみせる。彼女は、これまでコールドフィールド家とサトペン家の死にゆく人びとをただ見守って来たわけだが、最後に自らサトペン物語の謎を解くために、屋敷に潜むものの正体を探るべくクエンティンとともに屋敷に乗り込むのであり、結果として彼女のこの行為は、サトペン一族の生き残りであるヘンリーとクライティを「殺す」。そしてこの2人がサトペン屋敷とともに燃えていく光景を目の当たりにしたローザは、その現場から救急車で町へと運ばれ、昏睡状態に陥り、そのまま死ぬのだ（301）。彼女の死についてシュリーヴは **“And she went to bed because it was all finished now, there was nothing left now, nothing out there now”** (301) と述べる。おそらくこれはある意味では正しい——ヘンリーとクライティの死を確認したいま、彼女にとってその死を見届けるべきひとはもういないのだ。生まれた時からつねにすでに死者を哀悼しながら生きてきた彼女には、しかしながら、もうひとつしなくてはならないものが残っているはずだ。それはいうまでもなく、死者に対する「喪」である。ヘンリーとクライティの死を目撃するだけでは、彼らの死はローザにとって「あるべきところ」に収まらないはずであり、それをするためには彼女は彼らの死を悼まなくてはならない。ローザは、弔うべき死者がいなくなったために死ぬのだが、それと同時に、彼女の死そのものがヘンリーとクライティに対する弔いになっているといえるだろう。

自らの死によってヘンリーとクライティの死を悼むことで、ローザは最後の「喪」を遂行する。だが、彼女にとって最後の「喪」の行為は、たんにヘンリーとクライティの死に対するものではないだろう。サトペンの2人の子ども——父親が黒人の女に生ませた実の兄を殺さなくてはならず、晩年になって死ぬためにサトペン荘園へ帰ってきたヘンリーと、サトペンが黒人奴隷に生ませ、誰よりも長い間父親の一家を守り続けたクライティ——が、サトペン屋敷とともに焼けてなくなる様子は、ローザにとって、サトペン物語の終わりを意味したに違いない。この光景を見て死んだ彼女による弔いの行為は、結果として、ヘンリーとクライティだけでなく、彼女が長い間それに向き合って来なかったサトペンの死をも悼むものとなっているといえるだろう。ローザは、自らの死をもってサトペンの死を受容し、忘れ、サトペン一族への「喪」を完了させるのだ。では、6章に始まったクエンティンによるサトペン物語再構築は、ローザによる最後の弔いに

どのように対応するのだろうか。

本稿でこれまで述べてきたように、ローザの人生における「喪」の行為と、クエンティンによる語りの変遷には類似がみられる。この類似は、クエンティンが語りのなかでサトペン／南部／自己についてわかっていくなかで、自分にサトペン物語を語らなくてはいけなかったローザについても学んでいき、それ自体がローザの死を追悼する儀式のようになっていることを示すのだろう。6章から8章でサトペン物語を解釈するなかで、クエンティンは、南部において人種混交は近親相姦よりも忌避すべきものであるという掟を学び、また自らがその南部の掟のもとで生きてしまっているのだと痛感する。9章初めには、以下のようなクエンティンとシュリーヴの会話がある。

“Yes. You don’t know. You don’t even know about the old dame, the Aunt Rosa.”

“Miss Rosa,” Quentin said.

“All right. You don’t even know about her. Except that she refused at the last to be a ghost. That after almost fifty years she couldn’t reconcile herself to letting him lie dead in peace. That even after fifty years she not only could get up and go out there to finish up what she found she hadn’t quite completed, but she could find someone to go with her and bust into that locked house because instinct or something told her it was not finished yet. Do you?”

“No.” Quentin said peacefully. (289-90)

物語再構築の途中では、ローザを“Aunt Rosa”と呼ぶシュリーヴに対して注意をしなくなっていくクエンティンだが、ここで彼は6章の初めと同様にそれを“Miss Rosa”と訂正する。この訂正は、しかし、6章初めのそれとは意味合いが違う。彼はサトペン物語／ローザに対するわからなさからその語りを始め、物語を再構築するなかでローザを再認識し、彼女を悼むようになっている。そうであるから、9章で彼がローザを“Miss Rosa”と呼ぶとき、その呼称は「死んでしまった、いまだ不可解な“Miss Rosa”」に対する敬意ではなく、「生涯をかけて南部人としての苦悩を引き受けた“Miss Rosa”」に対するものへと変わっているのだろう。

自分はローザについて知らないのだと「穏やかに」認めるクエンティンは、サトペンの物語を語り終えてもなお、というよりもむしろ、それを語り終えてしまったからこそ、ローザをよくわかっていないと認められるのだと考えられる。南部の歴史の重みをきわめて個人的なかたちで痛切に実感したクエンティンは、南部人であることの苦しみをローザと共有しながらも、彼女の物語は決して南部のそれに回収され得ないと学んでいるのだ。彼はローザを理解したからこそ、彼女をわからない。そうであるから、彼は9章においてトラウマ的出来事であるヘンリーとの邂逅を語ることができるのだ。

こうして、屋敷に潜む何者かを探るべくクエンティンとともに屋敷へ乗り込むというローザによる最後の「喪」の行為と、そこで出会ったヘンリーについて思い出すというクエンティンによるサトペン物語再解釈の最終段階とは重なり合う。屋敷での出来事の回想を終えたクエンティンに対してシュリーヴは “And so it was the Aunt Rosa that came back to town inside the ambulance” (301) というが、クエンティンはそれに答えない——“he did not even say, Miss Rosa” (301)。そして彼はようやく、コンブソン氏からの手紙の続きを読むことができるのだ——“Now he (Quentin) could read it, could finish it—the sloped whimsical ironic hand out of Mississippi attenuated, into the iron snow” (301)。ローザの死に対する「喪」の行為をやり遂げたクエンティンは、いまだ “Aunt Rosa” と呼び続けるシュリーヴを咎める必要もないし、父親によるローザの死への解釈に惑わされる必要もない。手紙を読み終えても、クエンティンは何ごとともなかったかのようにすぐにシュリーヴの質問に耳を傾けるのだ (302)。なぜなら彼はすでに、ローザによる「喪」の行為がそうであったように、「死者を弔い、内面化し、忘却するための儀式、つまり死者を『あるべきところ』に収めるための儀式」を済ませているからである。

しかしながら、ローザが最終的には自身の死をもってその人生における「喪」を終えているのに対し、作品の最後に “I don't hate it [the South]” (303) と繰り返すクエンティンは、少なくともローザの弔いを終えた段階では、南部人として生きていかなければいけないという覚悟を抱くようになってきているようだ。それは、「南部の歴史、南部の過去と自分とのかかわりなしには、現在の自分は存在しえない、という歴史研究の基本信条とでも呼べるような姿勢」(平石『メランコリック』268)であり、クエンティンは、6章から9章において生前のローザと「喪」の行為をともにすることで、決して終わらない旧南部共同体への哀悼を引き継いでいるようにみえる。だが、その一方で、平石貴樹が説得的に論じるように「クエンティンの歴史認識は、かれの自殺と引きかえだからこそ、あれほど個人化されえた」のであり、「フォークナーはかれが死ぬとわかっていたから、これほどの運命をかれ一人になわせたのであり、かれの死は、サトペン物語を個人で引きうける際に支払わねばならなかった予定調和的な代償なのだ」(『小説』170)と考えると、クエンティンによるローザに対する「喪」は、彼がこの半年後に自殺を遂げることでようやく完了されるのかも知れない。そうであるとすれば、彼ら2人の「喪」の行為は、まさしくその初めから最後まで、同じ道のりを辿っているのだ。

結論

最後に、ローザによる「喪」とクエンティンによる語りの変遷が重なり合い、それがローザへの弔いになっている物語構造のもつ意味を考えたい。2人の「喪」の行為は物語の構造のレベルで相似の関係にあるものの、ローザとクエンティンそれぞれの南部共同体との関係は、決して同じではない。ジェンダーが違うのはもちろん、彼らが生きた

時代は南北戦争前後で大きく隔てられているし、それぞれのサトペン神話との関わりもまったく異なる。畢竟するに、彼らがお互いをわかり合うのは不可能なのだ。6章から9章までの北部を舞台にしたクエンティンの物語は、あくまでもクエンティンのものであり、そこで再構成されるサトペンの生い立ちから彼の「デザイン」とその失敗に関する壮大な物語、ヘンリーによるボン殺害という物語最大の謎解きにおいて、ローザはほんの脇役に過ぎないのだし、事実、その物語のクライマックスにおいて彼女の存在は「ない」。ワインスタインがいうように、サトペンは「他者による想像的な語りを通して再生されなければならない」が、そうした語りにあずかることが出来るのは「男性たちだけ」なのだ (Weinstein 91)。そうではあるものの、クエンティンによるサトペン物語の再構築がローザへの「喪」の行為としての性質を帯び、それが彼の気付かない、目にみえないレベルでローザの人生による「喪」の変遷を辿っているという事実は、むしろそれが目にみえないレベルにあるがゆえにいつそう、深い意味を持つように思われる。この構造は、南部に生きる個人の物語の根底には南部という大きな物語が共通してあるにもかかわらず、個々の物語は決してそれに回収されずに存在するという意味で『アブサロム、アブサロム!』という小説をより重層的にするだけではなく、南部人男性の物語と南部人女性がそれぞれ抱く、決して交わることのない物語の連鎖が、南部の歴史を作ってきたことを物語る。クエンティンが追体験するサトペン物語がクライマックスを迎え、ローザの想像が決して及ばない、彼女から最も離れた場所に行き着いたかのようにみえる瞬間こそが、2人が最も近づいた瞬間なのかも知れないのだ。『アブサロム、アブサロム!』における6章から9章は、南部の死を弔い続けなければならなかったひとりの南部人女性と、彼女の死を弔うひとりの南部人男性の声が重なり合い、南部の歴史の重みをまざまざとわれわれ読者にみせつけるといえるだろう。

引用文献

- Dimino, Andrea. "Miss Rosa as 'Love's Androgynous Advocate': Gender and Narrative Indeterminacy in Chapter 5 of *Absalom, Absalom!*" *Faulkner and Gender*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1996. 181-96. Print.
- Edenfield, Olivia Carr. "'Endure and Then Endure': Rosa Coldfield's Search for a Role in William Faulkner's *Absalom, Absalom!*" *Southern Literary Journal* 32 (1999): 57-68. Print.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!: The Corrected Text*. New York: Vintage, 1990. Print.
- Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: U of Georgia P, 1994. Print.
- Scott, Anne Firor. *The Southern Lady: From Pedestal to Politics, 1830-1930*.

Charlottesville: UP of Virginia, 1995. Print.

Weinstein, Philip. "Meditations on the Other: Faulkner's Rending of Women."

Faulkner and Women. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1986. 81-99. Print.

諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学——1930-1936』松柏社、2008年。Print.

平石貴樹『小説における作者のふるまい——フォークナー的方法の研究』松柏社、2003年。
Print.

——『メランコリック デザイン——フォークナー初期作品の構想』南雲堂、1993年。Print.

藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想——『アブサロム、アブサロム！』の真実』研究社、
2008年。Print.